巻頭言

「蘇生を賭して」

土　田　隆　生*

Anticipation for Revivification

近頃，子ども達が木を描くのを見て驚いた。桜の木の幹をクレヨンの黒で描いていたからである。木の幹，特に桜は昔からその木肌の美しさ，すなわちエンジがかった艶のある茶色が喜ばれて，杖にされたり，民芸調の小箱等にされてきた。それをなぜ黒色になのかと，子ども達の視線の先を見ると，なんと，桜の幹は真っ黒だった。子ども達はただリアルに表現をしていただけである。

今，桜の幹は黒色なのである。桜の木だけでなく，見渡せば周りの木の幹が，今どれもみな黒っぽいのに気づく。酸性雨の影響である。酸で焼かれて黒ずんでいるのである。

酸性雨については日本でも，森や湖の酸性化，コンクリートツララ，小学校では朝顔の花の斑点の観察で教える等，繰り返し警告されてはいるものの，他の環境問題のようには声高には成っていない。勿論この木の幹の色に関しては，誰もまだ言及はしていない。

我々が子どもの頃や若者だった時に見た茶やベージュの木の色は，いつの間にかその元の色を失ってきている。そのことを改めて指摘すると，皆「そう言えばそうだ」と驚く。人々は少しずつ変わっていく変化には気付かないのである。人間は，そのように自然の美しさが奪われていくのを日々目にしながらも，認識にいたることなく，かっての自然の美しさを少しずつ忘れ去ってきている。それが現代人の現実である。しかし現代の子ども達にとっては，木の肌の色は最初から暗灰色であったり，黒色なのである。美しい木の肌の色が初めから無いというのが，彼等の悲しい現実なのである。

木の色をもっと注意深く観察すると，小枝は太幹より若いのでその色は当然明るいはずが，逆に幹より暗いのである。逆転しているのである。おそらく，小枝は若く柔らかい分，酸性雨に弱く，より激しくその酸で焼けるからと思われる。又，上方や外側にある小枝は降る雨に曝される度合いが高いことも関係してのことだろう。上へ先へ行くほど今の木の色は暗く黒いのである。

環境問題が心配なのは，今よりももっと将来が危ういことにある。深刻に日々進行していく環境悪化で，大人よりも弱い子ども達が，そしてその子ども達の次世代がどうなってしまうのかと言うことである。何か，酸性雨で黒く成っていく小枝が，今の子ども達の運命を暗示しているようで恐怖すら感じる。我々は我々の世代の欲望のために，子ども達の現在から明るさを奪い，その未来さえも暗黒の色で塗り潰そうとしてはいないだろうか。

今，世界はひたすら，快適性と贅沢を追い求めるという「不可逆の過程」から生じるエゴイズム体制，すなわち「力の文明」を中心として動いている。その「力の文明」は強力である。今後もその力は不可逆的に強大と成って世界を動かそうとしていくことだろう。その世界の中では，力による争いと環境破壊が決して絶えることはない。

「希望を持たず，私たちは欲望の中に生きている。」と言ったのはダンテである。希望（ホー

＊京都女子大学家政学部教授（児童表現学）
Takao Tsuchida

プ）のない欲望だけの満足で果たして人は生きられるのかと，ダンテはこの短い言葉の中で鋭く問いかけている。

「力の文明」に対置できるのは，人の温もりのある「教育」だけである。人間の生き方を全発達的に問い直す「教育」だけである。一人一人が大切にされる教育を受けた子ども達が，人間らしく生きることとはどういうことかを正しく感じながら育ってくれれば世界は未来へと続いていくのである。そのための「教育」が今こそ求められるのである。子ども達という小枝の蘇生を賭してである。

益々，混迷を深めるこの現代社会状況に対応すべく，本年4月より，今までの家政学部児童学科と文学部教育学科とが一つに成って，新たに「発達教育学部」が発足する。人間発達を，別々であった児童学的視点と教育学的視点から，総合的に捉え直し，より広くより深く探求する中で，子ども達が「人間として心豊かな生き方」を考え，その実現に向けての調和的・総合的な「生きる力」をつけていくための適切な支援のできる人材育成を目指してである。

この新学部発足に伴い，長年続けられる中で多大な研究業績を重ね，広く子育て社会に貢献の足跡を残し，常に我々の学問的研究精神の支柱と成ってきたこの「児童学研究」も，新たに生れる「発達教育学紀要」に参加することにより，本34号をもって発展的に閉刊することと成った。

今日まで，この「児童学研究」を育て，お世話下された方々，そして寄稿や愛読いただいた多くの皆様に感謝し心より御礼申し上げると共に，新たなステージへの参加を切望いたします。